

青年期広汎性発達障害者におけるTATの特徴：人間表象の観点から

著者	関山 徹
雑誌名	鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編
巻	66
ページ	139-147
発行年	2015
別言語のタイトル	Rereading The Sun Also Rises: From the Viewpoint of Gothic "excess"
URL	http://hdl.handle.net/10232/23262

青年期広汎性発達障害者における T A T の特徴： 人間表象の観点から

関 山 徹*

(2014年10月28日 受理)

Features of Thematic Apperception Test in Adolescents with Pervasive Developmental Disorder: From the Perspective of Human Representations

SEKIYAMA Toru

要約

広汎性発達障害者の人間表象の特徴を分析するために、T A T 反応に現れた登場人物の描写を検討した。調査協力者は、広汎性発達障害者の群 19 名 (P 群) および同人数の対照群 (N P 群) であった。その結果、P 群は N P 群と比較して、①物語内に登場させる人数が少ないこと、②登場人物同士の関係が確定的でないこと、③登場人物同士の関与の程度が弱いこと、④登場人物の内面についての言及が少ないこと、⑤登場人物に愛着対象を見ることが少ないことが明らかになった。また、P 群は人間関係への関心が低いと考えられるものの、基本的な対人知覚能力が劣るわけではなく視覚的な手掛かりの有無によって関心の程度が影響を受けやすいと推察された。

キーワード：自閉症スペクトラム障害、アスペルガー障害、認知的共感、人間知覚、投映法

I. 問題と目的

自閉症やアスペルガー障害に代表される広汎性発達障害は対人コミュニケーションの広汎な障害によって特徴づけられる。ある自閉症者は、上手に挨拶ができない理由について、自らの著書で「僕には、人が見えていないのです。人も風景の一部になって、僕の目に飛び込んでくるからです」と説明している (東田, 2014)。近年、このように自閉症者自身がその体験を書籍などを通じて具体的に語ってくれることが増えてきたものの、その体験世界は十分に理解されていると

* 鹿児島大学教育学部 准教授

は言い難い。また、自閉症者を含む広汎性発達障害者について、投映法を用いてアプローチした研究はまだ多くない。投映法の持ち味は、語り手（調査協力者）の世界を追体験しやすいと同時に、その体験様式を定量的にも把握できる点に持ち味がある（関山，2013）。国内における先行研究では、ロールシャッハ・テストによるものがいくつか存在するが（たとえば内田ら（2012）や鈴木ら（2010）、明翫・辻井（2007）など）TATを用いたものは少ない。石牧（2012，2010）は、TATを用いて広汎性発達障害者の研究に取り組んでおり、その認知特徴を絵刺激の反応領域やその他のいくつかの観点から分析しているが、広範にアプローチしているために人間関係について多く触れていない。一方、近年のTAT研究では、人間知覚のパターンやそれをもとに推測される人間表象に焦点をあてたアプローチが盛んになりつつある（たとえば関山（2003）やWesten（1991）やWesten et al.（1990a;1990b）など）。そこで、本研究では、広汎性発達障害者の人間表象の特徴を、TATを用いて多角的にとらえることを目的とした。

II. 方法

1. 調査協力者

広汎性発達障害者群（Pervasive Developmental Disorder 群；以下、P群と略す）は、広汎性発達障害と診断された青年19名の群であり、知的障害を伴っていない。その構成は、男性16名、女性3名であり、所属は、高等学校が8名（高等特別支援学校の2名を含む）、専門学校が5名、大学が3名、企業が1名、アルバイトが2名であった。また、平均年齢は18.47歳（SD 2.46）であった。

Table 1 調査協力者の性別・年齢・所属

P群				NP群			
番号	性別	年齢	所属	番号	性別	年齢	所属
1	男	15	専門学校	1	男	15	専門学校
2	男	16	高等特別支援学校	2	男	15	高等学校
3	男	16	高等学校	3	男	16	高等学校
4	女	16	高等学校	4	女	16	高等学校
5	女	16	専門学校	5	女	16	高等学校
6	男	17	高等学校	6	男	17	高等学校
7	男	17	高等学校	7	男	17	高等学校
8	男	17	高等学校	8	男	18	高等学校
9	男	18	高等特別支援学校	9	男	18	高等学校
10	男	18	高等学校	10	男	17	高等学校
11	女	19	専門学校	11	女	18	高等学校
12	男	19	大学	12	男	20	大学
13	男	19	大学	13	男	20	大学
14	男	19	専門学校	14	男	19	企業（店員）
15	男	21	専門学校	15	男	20	大学
16	男	21	大学	16	男	20	大学
17	男	21	企業（運送業）	17	男	20	大学
18	男	22	アルバイト	18	男	23	アルバイト
19	男	24	アルバイト	19	男	24	アルバイト

対照群（Non Pervasive Developmental Disorder 群；以下、N P 群と略す）は、学業ないしは職業などの日常生活を支障なく過ごしている青年19名の群である。P 群の構成にできる限りマッチングさせて、男性16名、女性3名とし、所属先は、高等学校が10名、専門学校が1名、大学が5名、企業が1名、アルバイトが2名とした。平均年齢は18.37歳（SD 2.50）であった。

両群の詳細な構成は、Table 1に示した。両群とも中部地方に居住している者であり、本人の同意を得たデータを用いている。また、TATの実施は、P 群は1999年から2001年までの間、N P 群は1986年から2001年までの間であった。

2. 手続き

TAT（ハーバード版）の実施は調査協力者ごとに個別におこない、その方法は鈴木(1997)に準拠した。ただし、分析に使用する図版は、カード1、2、3BM、4の4枚とした。さらに、得られた反応から逐語録を作成し、それを分析の対象とした。

各カードに出現したTAT反応の分析は、次の5つの観点から整理する方法をとった。

1つめは、登場人物の人数に着目した観点である。具体的には、4つの水準を設定し、反応ごとに該当するレベル値を決めていくものである。レベル1は最も低い水準であり、TAT物語内において登場人物が何人いるか不明な反応、換言すれば人物間の境界が曖昧な反応が該当する。レベル2は、物語内における登場人物の数が、カードに明確に描かれている人物の数よりも少ない場合に該当する。たとえば、カード2には3名の人物が描かれているが、物語内に2名しか登場人物が現れていないのであればレベル2となる。レベル3では、登場人物が他の登場人物から明瞭に分化しており、カードに描かれた人物数と同じ人数の登場人物が述べられている。レベル4は最高水準であり、このレベルでは物語内にカードに描かれた人物数よりも多い人数の登場人物が述べられている。なお、登場人物は必ずしもカード上の人物像と一致する必要はない。

2つめは、登場人物同士の関係性に着目した観点で、4つの水準が設定されている。レベル1は最低水準であり、登場人物間の間柄についてまったく説明されていない場合に該当する（登場人物が1名の場合にも該当する）。レベル2は、登場人物同士の関係が匿名的ないしは、一時的、集会的に説明されている場合である。たとえば、たまたま通りがかっただけの関係や群衆を見た反応が該当する。レベル3は、物語内における登場人物同士の関係性において少なくとも1対について明瞭にその間柄が示されているものの、残りの他の対ではレベル2相当の説明がなされている場合に該当する。最高水準のレベル4では、物語内における登場人物同士の全ての間柄が確定的に述べられている。また、ここで言う明瞭な間柄とは、他の間柄では交換不可能な関係性であり、たとえば、夫婦や親子、恋人、友人、上司・部下、教師・生徒などである。

3つめは、登場人物同士の関与のあり方に着目した観点である。ここでも4つの水準が設定されており、登場人物間にどのような交流が述べられているかを評価していく。レベル1は最も低い水準を表し、登場人物間に何ら関与がない場合に該当する。レベル2では、登場人物間に弱い

関与が述べられている。弱い関与とは、特定の他者を志向しているが顕在的でない行為を指す。たとえば、特定の誰かを待つ、特定の誰かを監視する、特定の誰かを捜すなどである。レベル3では、登場人物間に強い関与が述べられている。強い関与とは、明示的な対人的行為を指し、たとえば、教える、話しかける、買い与える、命令する、使役する、引き留める、許す、謝罪する、叱る、襲うなどである。レベル4では、1つ以上の登場人物同士の対のなかに相互作用が述べられており、具体的で双方向の強い関与が含まれていなくてはならない。したがって、「喧嘩する」や「結婚する」などのように一言で表現されているだけのものは、相互作用は認められるが具体的なやりとりに乏しいので、レベル3に留める。

4つめは、登場人物の内部状態に着目した観点であり、3つの水準が設定されている。レベル1では、登場人物の心身の様子について何ら言及されていない。レベル2では、内部状態が身体的基盤から語られている。たとえば、疲労や酩酊状態、眠気などの体調の面からとらえた反応や、泣く、笑うなどの表情や身振りを直接的に説明した反応が該当する。レベル3では、登場人物の内部状態が心理的観点から説明されており、感情や思考、意図、あるいは登場人物についての性格描写が語られている。なお、ここでの感情とは、たとえば、泣く・笑うの身体的表出の背後にある、悲しみ・喜びの次元まで言及されたものを指す。

5つめは、2つめの観点から派生したものであり、登場人物同士の間柄がどの程度の愛着関係を伴って語られているかについて着目する。レベル1は、最も低い水準であり、登場人物間の間柄についてまったく説明されていない場合に該当する（登場人物が1名の場合にも該当する）。レベル2は、登場人物同士の関係が匿名的ないしは、一時的、集合的に説明されている場合である。レベル3では、継続的な関係にある間柄が述べられている。レベル4は、親子や恋人などの愛着に関係した間柄が言及されている場合に該当する。レベル5は、愛着対象の喪失（予感も含む）や獲得について語られている場合に該当する。

以上の5つの観点による評定は、筆者と修士課程を修了した心理士との合議によって決定した。また、各観点の評定値は、調査協力者ごとに合計し、カードの枚数で除して、カード1枚あたりの値に換算した。

Ⅲ. 結果と考察

登場人物描写に関する5つの観点の評定値について両群の平均値（SD）を算出し、 t 検定をおこなった（Table 2を参照）。その結果、全ての観点において、P群の平均値はNP群に比して有意に低かった。すなわち、P群はNP群と比較して、物語内に登場させる人数が少なく、登場人物同士の関係が確定的でなく、登場人物同士の関与の程度が弱く、登場人物の内面についての言及が少なく、登場人物に愛着対象を見ることが少なかった。また、各観点のカードごとの度数分布を Table 3から Table 7までに示した。

Table 2 人間表象の各側面の平均値 (SD)

	P 群		NP 群		t 値 (df=36)
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
人物数	3.17	(.26)	3.53	(.28)	4.06***
関係性	2.71	(.48)	3.29	(.65)	3.13***
関与	1.91	(.52)	2.32	(.50)	2.46*
内部状態	2.32	(.42)	2.79	(.37)	3.73***
愛着対象	2.86	(.67)	3.64	(.76)	3.41***

(*: $p < .05$, ***: $p < .005$)

Table 3 人物数の観点から評定した結果 (度数分布)

	カード1		カード2		カード3 BM		カード4		4枚合計	
	P 群	NP 群	P 群	NP 群	P 群	NP 群	P 群	NP 群	P 群	NP 群
レベル1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
レベル2	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (26.3%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (5.6%)	1 (1.3%)
レベル3	11 (57.9%)	5 (26.3%)	14 (73.7%)	14 (73.7%)	13 (68.4%)	5 (26.3%)	15 (78.9%)	10 (52.6%)	53 (69.7%)	34 (44.7%)
レベル4	8 (42.1%)	14 (73.7%)	0 (0.0%)	4 (21.0%)	6 (31.6%)	14 (73.7%)	4 (21.1%)	9 (47.4%)	18 (23.7%)	41 (54.0%)

Table 4 関係性の観点から評定した結果 (度数分布)

	カード1		カード2		カード3 BM		カード4		4枚合計	
	P 群	NP 群	P 群	NP 群	P 群	NP 群	P 群	NP 群	P 群	NP 群
レベル1	9 (47.4%)	5 (26.3%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	14 (73.7%)	5 (26.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	24 (31.6%)	10 (13.2%)
レベル2	2 (10.5%)	0 (0.0%)	5 (26.3%)	6 (31.6%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)	2 (10.5%)	2 (10.5%)	9 (11.8%)	9 (11.8%)
レベル3	0 (0.0%)	0 (0.0%)	6 (31.6%)	5 (26.3%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)	1 (5.3%)	8 (10.5%)	6 (7.9%)
レベル4	8 (42.1%)	14 (73.7%)	7 (36.8%)	8 (42.1%)	4 (21.1%)	13 (68.4%)	16 (84.2%)	16 (84.2%)	35 (46.1%)	51 (67.1%)

Table 5 関与の観点から評定した結果 (度数分布)

	カード1		カード2		カード3 BM		カード4		4枚合計	
	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群
レベル1	13 (68.4%)	8 (42.1%)	15 (78.9%)	11 (57.9%)	14 (73.7%)	12 (63.2%)	2 (10.6%)	2 (10.6%)	44 (57.9%)	33 (43.4%)
レベル2	1 (5.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.3%)	0 (0.0%)
レベル3	4 (21.0%)	11 (57.9%)	3 (15.8%)	7 (36.8%)	5 (26.3%)	4 (21.0%)	13 (68.4%)	7 (36.8%)	25 (32.9%)	29 (38.2%)
レベル4	1 (5.3%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	3 (15.8%)	4 (21.0%)	10 (52.6%)	6 (7.9%)	14 (18.4%)

Table 6 内部状態の観点から評定した結果 (度数分布)

	カード1		カード2		カード3 BM		カード4		4枚合計	
	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群
レベル1	2 (10.5%)	2 (10.5%)	12 (63.2%)	1 (5.3%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	4 (21.1%)	3 (15.8%)	19 (25.0%)	6 (7.9%)
レベル2	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	12 (63.2%)	4 (21.1%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	14 (18.4%)	4 (5.3%)
レベル3	17 (89.5%)	17 (89.5%)	6 (31.5%)	18 (94.7%)	6 (31.5%)	15 (78.9%)	14 (73.6%)	16 (84.2%)	43 (56.6%)	66 (86.8%)

Table 7 愛着関係の観点から評定した結果 (度数分布)

	カード1		カード2		カード3 BM		カード4		4枚合計	
	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群	P群	N P群
レベル1	9 (47.4%)	5 (26.3%)	1 (5.3%)	0 (0.0%)	13 (68.4%)	5 (26.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	23 (30.3%)	10 (13.2%)
レベル2	2 (10.5%)	0 (0.0%)	6 (31.6%)	3 (15.8%)	0 (0.0%)	1 (5.3%)	2 (10.5%)	3 (15.8%)	10 (13.2%)	7 (9.2%)
レベル3	2 (10.5%)	0 (0.0%)	3 (15.7%)	3 (15.8%)	1 (5.3%)	1 (5.3%)	2 (10.5%)	0 (0.0%)	8 (10.4%)	4 (5.3%)
レベル4	5 (26.3%)	12 (63.2%)	8 (42.1%)	9 (47.4%)	2 (10.5%)	4 (21.0%)	10 (52.7%)	9 (47.4%)	25 (32.9%)	34 (44.7%)
レベル5	1 (5.3%)	2 (10.5%)	1 (5.3%)	4 (21.0%)	3 (15.8%)	8 (42.1%)	5 (26.3%)	7 (36.8%)	10 (13.2%)	21 (27.6%)

まず、人物数については、Table 3を見るとP群の総反応の約7割がレベル3相当の反応であり、カードに描かれた人物数と同じ人数の登場人物を物語ったということが分かる。P群は、人物数

に関しては、カードの絵刺激が要請する反応ができていえるだろう。同時に、NP群のようにカードの絵刺激が要請する範囲を超えて、別の人物を登場させることは少なかったとも考えられる。藤田(2001)は、導入人物の多さは对人的関心の高さに関係すると述べている。P群は人間知覚の面ではNP群と同等の能力を有しているものの、与えられた以上の人物を加えていく能動性の面では劣り、人間関係への関心が受身的なのかもしれない。また、カードごとの度数分布を見ても4枚のカードに共通してこの傾向が現れていることが認められるため、P群の特徴をとらえるための重要な指標であると考えられる。

関係性については、Table 4を見るとP群の全体の傾向として、レベル1相当の反応とレベル4相当の反応に二極化していた。さらに、カードごとに見ていくと、カード1とカード3BMにおいてレベル1相当の反応が多く出現していた。この2枚のカードの絵刺激は人物像が1名しか描かれていないため、反応内における登場人物の出現が少なかったことが影響した可能性がある。一方、絵刺激に複数人が描かれているカード2とカード4では、P群とNP群はほぼ類似した反応傾向を示していた。P群は、絵刺激に手掛かりがあれば間柄について言及できることから、関係性への気づきに関しても受身的であると考えられよう。

関与については、Table 5を見るとP群の全体の傾向として、レベル1相当の反応が6割弱を占めていた。P群はNP群に比して、登場人物間に関わり合いを述べず、関わり合いを持たせたとしても相互作用的なものは少ない傾向にあり、人間関係への関心が低いと考えられる。しかしながら、関与の有無は、やはり登場人物の人数に依存する側面があるのでその点を差し引いて解釈する必要もあるだろう。

内部状態については、Table 6を見ると、P群は特にカード2とカード3BMにおいてレベル3相当の反応が少なかった。カード2においてはレベル1相当の反応が6割以上を占めていた。カード2は「3人の人物がいる複雑な場面」であるため、「被検者にとっては、かなり緊張し、とまどう図版」と言われている(山本, 1992)。P群は登場人物間の関係性を特定するほうに心理的資源を集中させてしまった結果、内部状態の描写については疎かになってしまったのかもしれない。また、カード3BMでは、P群はレベル2相当の反応が6割以上も占め、その具体的内容として疲労状態を見た者が多かった。対照的に、NP群では、同じカードで悲嘆(レベル3相当)を見る反応が頻出し、しかもその悲嘆は人間関係に由来するものが多かった。これらのことから、NP群が人間関係から登場人物の内部状態を想像するのに対して、P群は登場人物の姿勢などの視覚的な手掛かりから内部状態を想像する傾向があると推察される。

愛着対象については、関係性の観点と共通する面が多いが、Table 7を見ると全体的な傾向として、P群はNP群に比して愛着対象の喪失や獲得を見た反応(レベル5相当)が半分以下であった。また、NP群においても、レベル4に比してレベル5の出現率が低かったことから、やはりレベル5相当の反応を産出するためには、人間関係に対するより強い関心が必要であると考えられよう。そして、P群は愛着対象に言及した反応(レベル4相当)もやや少なかった。P群は、

絵刺激に対して中立的に関わる傾向があるために、絵刺激に感情移入してそこに重要な他者を見出すことができなかったのだろう。

以上を総合すると、P群はNP群に比して、TATの絵刺激における人間知覚に関しては劣っていないものの、人間関係への関心が低いと推察される。そして、その人間関係への関心の低さは、絵刺激上の視覚的な手掛かりの有無によって影響を受けやすいと考えられる。千住(2014)は「自閉症者における認知的共感の障害は、他者の心的状態を表象することそのものの障害ではなく、心的表象を形成するのに必要な手がかりを効率的に検出し、認識する傾向の弱さに基づいている可能性がある」と指摘しており、本研究の結果に重要な示唆を与えてくれる。広汎性発達障害者は人間関係への関心を失っているわけではなく、明示的な手掛かりがあればそれを起点にして、対人的な関心を展開できる余地を持っていると考えられないだろうか。また石牧(2010)は、広汎性発達障害のTAT反応を分析して、彼らが図版の刺激材料を適切にまとめて物語をつくるのが苦手であるとの考察を示しており、人間表象のみに特化したアプローチで相通ずる考察に至った点は意義深い。広汎性発達障害者は実生活において人間関係上の困難が多いと言われているが、本研究ではその体験様式をTAT反応から量的に抽出できた点で一定の成果があったと言えよう。

しかしながら、本研究にはいくつか限界や問題点を含んでいるため、本研究で得られた知見は控えめに受け取ったほうがよいだろう。TATは物語をつくる課題であるため、調査協力者の知能を統制しておきべきであった。両群のマッチングは充分とはいえず、標本数も少ない。また、関係性や関与についての観点が人物数の影響を受ける点など、評定方法にも課題が残る。観点の統合などをして、より整合的で簡潔なものに改善していきたい。

文献

- 藤田宗和(2001) TATの情報分析枠(the Frame of Information Analysis)の提案:プロトコル分析のための新しい枠組み. 犯罪心理学研究, 39(29), 1-16.
- 東田直樹(2014) 跳びはねる思考:会話のできない自閉症の僕が考えていること. イースト・プレス.
- 石牧良浩(2010) 広汎性発達障害者のTAT反応に関する研究. ロールシャッハ法研究, 14, 27-34.
- 石牧良浩(2012) TAT反応領域からみた広汎性発達障害者の認知特徴. ロールシャッハ法研究, 16, 13-20.
- 明翫光宜・辻井正次(2007) 高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴:反応様式の質的検討. ロールシャッハ法研究, 11, 1-12.
- 関山 徹(2003) 統合失調症患者のTATにおける人間表象. ロールシャッハ法研究, 7, 23-36.
- 関山 徹(2013) TAT(主題統覚検査). 臨床心理学の実践:アセスメント・支援・研究, 金子書房, 83-104.
- 千住 淳(2014) 共感と自閉スペクトラム症. コミュニケーションの認知科学2:共感, 岩波書店, 101-121.
- 鈴木睦夫(1997) TATの世界:物語分析の実際. 誠信書房.
- 鈴木朋子・吉野真紀・内田良一・上野千穂・木下利彦(2010) 広汎性発達障害のロールシャッハ・テストにおける特

- 徴：再検査を通して．ロールシャッハ法研究，14, 18-25.
- 内田裕之・明翫光宣・辻井正次 (2012) 自閉症スペクトラム障害のコミュニケーションの問題について：ロールシャッハ・テスト質疑段階でのやりとりを通して．ロールシャッハ法研究，16, 3-12.
- Westen, D. (1991) Social cognition and object relations. *Psychological Bulletin*, 109(3), 429-455.
- Westen, D., Lohr, N., Silk, K., Gold, L. & Kerber, K. (1990a) Object relations and social cognition in borderlines, major depressives, and normals : A Thematic Apperception Test analysis. *Psychological Assessment*, 2(4), 355-364.
- Westen, D., Ludolph, P., Lerner, H., Ruffins, S. & Wiss, C. (1990b) Object relations in borderline adolescents. *Journal of American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 29(3), 338-348.
- 山本和郎 (1992) 心理検査TAT関わり分析：ゆたかな人間理解の方法．東京大学出版会．